

「土佐日記」における漢文訓読語
楫取にもたらす効果を中心に

学生番号 〇六七一〇九

安田麻里子

(43字×34行)

目次

序	1
第一章 漢文訓読語の考察	
第一節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 一	4
第二節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 二	10
第三節 楫取の滑稽さを加える効果をもつ漢文訓読語	12
第四節 楫取への皮肉や厭味を加える効果をもつ漢文訓読語	15
第二章 漢文訓読語の表現と楫取	
第一節 楫取に対する気持ち	19
結	20
注	21
参考文献目録	23
資料 漢文訓読一覧表	23

序

貫之が女性仮託し、かな文字で書かれたと考えられている「土佐日記」において、漢文訓読語が用いられている箇所がある。これは女性仮託が破綻したためであるとか、不可抗力的に混用したためだという解釈がされていることが多い。しかし萩谷朴氏は、遠藤嘉基氏の考えを踏まえながら、訓読語の役割を以下のようにまとめている。

貫之は、作品の中でその場の情景と人物とを描写するのにふさわしく、男性的文体と女性的文体とを使い分けている。訓読語彙は、その男性的文体を表明する特色として、意図的に使用されているのである。

そして、「これは、訓読語彙の混用が無意識的ではなく、意識的になされたものであるとする点において、正に画期的な意見であった」としながら、「男性的文体を必要とした箇所に限られているか否かということになると、必ずしも、そうだとばかりは言えない」と述べ、以下のように考えている。

日記というものが、本来男性の執筆する漢字漢文のものであるという当時の社会的通念を前提として、それを女性が模倣して日記を書いているのだという女性仮託のポーズを完璧なものとするために、貫之は、肩肘張って男の真似をしている女性作家という、苦肉の文章スタイルを意図して、わざと和文脈の中に違和感を生じるような訓読語彙をとどころに混用したのである。

また筑島裕氏は「これは当時の「言文一致運動」の先駆であったのではなからうか」述べる。一方遠藤嘉基氏は楫取や人々の会話部分などを例にあげ、それを「意識的な表現効果」と考えている。そしてこういった訓読語のもたらす効果を、「おかしさ」とするとする。

それは微笑笑とでもいうか、一種のおかしさである（…中略…）といった、笑いとおかしさは、バランスが失われた時に起きるものである。安定が敗れたときに、人は笑いに誘われる。おかしさを感じる。思うに、かじとりのことばに、おかしさを感じるのは、つまりは、彼らしくない改まったことばつかいに基づくのではないか

このように、訓読語に対して様々な考えがなされている。このことから、土佐日記の用いられている漢文訓読語彙には、その場面それぞれで意図的な役割があるのではないかと考えた。そこで、作中に見える訓読語を場面ごとに考察し、そのもたらす効果を考えた。

まず土佐日記に使われる訓読語を一つ一つ考察する。そこから場面ごとの訓読語が、どのような効果を持っているのかを考える。

考察に入る前にまず、以下のことを付け加えておく。^{注10} 筑島氏の指摘されている十二月二七日の「あるときには」の「或」は、訓読語の対象からはずしている。これは「あるときには」以外にも、ある人、ある童、などの用法で多く用いられているためでもある。また、『日本国語大辞典』^{注11}においても、「ある人」や「ある童」と同様のものとして「あるときには」を例に挙げている。

*万葉（8C後）九・一八〇一「この道を 行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ 或（ある）人は 啼（ね）にも泣きつつ 語りつぎ 偲ひつぎくる〈福麻呂歌集〉」
*大智度論天安二年点（858）二「有時（アルとき）には濡美の語をし、有時（アルとき）には苦切の語をし」*土佐（935頃）承平五年二月五日「京のちかづく喜びのあまりに、ある童のよめる歌」

「あるときには」を訓読とみなすことはできるが、筑島氏の指摘されたこの十二月二七日のみを訓読語とみなすことはしない。よって、ここでは訓読語の対象外としている。次に作中にみられる訓読語を挙げる。○内は、訓読語が用いられている対象の人物となっている。

十二月二十一日 ^{注12} それのとし （ナシ）

いささかに （ナシ）

かれこれ （ナシ）

くらべつる （ナシ）

十二月二十三日 くによりて （八木のやすのり）

十二月二十七日 くらひつれば （楫取）

十二月二十九日 くに似たり・くに似たる （薬師）

一月六日 くのごとし （物持て来る人）

一月七日 ひそかに （歌主）

そもそも （童・歌主）

一月九日 互ひに （一行・見送り人）

見えずして （楫取）

思へらず （船子・楫取）

悪しみして （船子・楫取）

一月十一日 今し （童）

一月十六日 なくして (ある人)
 一月十七日 やうやく (楫取)
 一月二十一日 いふやう—とぞいふ (楫取)
 一月二十三日 恐り (海賊)
 一月二十六日 申して奉る言は—と申して奉る (楫取)
 すみやかに (楫取)
 一月二十九日 いどこ (ナシ)
 いひけらく—といひて (女)
 一月三十日 うに似たり・うに似たる (楫取)
 二月一日 いはく (船君なる人)
 ひそかに (舟に乗る人↓船君なる人)
 二月四日 はなはだ (楫取)
 しかれども (楫取)
 二月五日 いはく—といふ (楫取)
 今し (ある童)
 ここに (亡児)
 いはく—といふ (楫取)
 曰く—と畏怖 (楫取)
 二月六日 いへれば (淡路の島の大御)
 二月七日 うにたへず (船君)
 二月八日 ひそかに (男ども↓ある人(楫取))
 二月九日 ここに (人々)
 いはく (人々)
 二月十六日 いはく—といふ (人々)
 ひそかに (心知れる人)

これを参考資料として、表にして別表にまとめた。以降はこの別紙の表を元に考察を進めていきたい。表からは、以下のことがうかがえる。

第一に、訓読語が用いられている効果としては、普段用いられている和語ではなく、わざわざ訓読語にすることによって、その箇所が強調されることになるということ。また漢文訓読語は、和文に比べて畏まった印象を与えるということだ。

第二に、漢文訓読語の使用されている対象の人物として、最も多いのは楫取であるということ。これは、それだけ多く漢文訓読語と同所に用いられているということになる。

計四十例の訓読語のうち、十五例が「楫取」や「船子」を対象として用いられている。

その他、対象のないものが五例。「人々」、「船君なる人（船君の病者）」、「童」が三例ずつみられる。「ある人」としかない人物に二例。以下、「八木のやすのり」、「淡路の島の大御」、「女」、「亡児」、「一行および見送り人」、「心知れる人」、「海賊」、「薬師」、「物持て来る人」、「歌主」といった人物に一例ずつとなっている。

このことから、「楫取」を対象として用いられている訓読語が圧倒的に多いということが分る。そこで訓読語の効果をあらわす対象を、「楫取」と「楫取以外」という、大きく二つに分類し、それぞれについての考察を行う。そこからさらに、楫取以外を対象として用いられている訓読語は、その効果ごとに四つに分けて考察する。また、楫取に対して用いられた訓読語がもたらす効果に、似た効果を表しているときみなされる訓読語が用いられている人物についても、楫取とは別に考察を行う。そして最後に楫取に関しては、楫取に対して訓読語がもたらしめている効果の違いを、二つに分類して考察を加えた。

第一章 第二節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 一

ここからは表を基にし、訓読語の対象となる人物と、訓読語がもたらしめている結果ごとに考察を加えていく。本節においては、楫取以外を対象として用いられている漢文訓読語について考察している。

まず第一に、文章に莊重味を加える効果を持つと考えられる訓読語を挙げている。これには以下の計六例が該当する。日記の初日である十二月二十一日の訓読語「それとし」「いささかに」「かれこれ」「くらべつる」の四例と、一月二十九日の「いどこ」「いひけらく」といひて」の二例だ。この六例を、用いられている日ごとに考察を加えていく。

十二月二十一日

十二月二十一日にある訓読語はどれも地の文にある。

「それとし」という語は、和文では「それとし」とあるべき箇所だ。これらの表現は、貫之ら一行が任期を終え帰京する年を量している事になる。これは臚化表現と取れる。

「いささかに」は、「少しばかり」書き付けてみる、という軽き気持ちを表現しているが、日記の作者は到底そのような軽い気持ちで書いているわけではない。またここは「そのよし、いささかに、ものにかきつく」とあることから、帰京後に書いたことを物語っている。

「かれこれ」は、本来「これかれ」とあるべき語である。一月九日には「これかれたがひに」とあり、和文語になっている。このことから、貫之はわざとここを「かれこれ」としていることが分かる。これは「かれこれ、知る知らぬ」という箇所と対応する。「知る知らぬ」は「知る人知らぬ人」というように、^{注13}「人」が省略されている。萩谷朴氏によれば、これは「彼（遠）——此（近）」、「知る（親）——知らぬ（疎）」という対句表現のためだという。

「くらべつる」については、萩谷朴氏が「比」という語が、和文の「ならぶ」「たぐふ」と共有され、「^{注14}「つきあふ」という意味が負荷」されたと考えている。「日本国語大辞典」にも次のようにある。

^{注15}
くらべる【比・較・競】

〈…前略…〉③心を通わせあう〈…中略…〉(3) 一方のクラ(座)と他方のクラ(座)とを見あわせることをいうところから、クラはクラ(座)の義

以上のことから、本来使用されにくい「くらべつる」という言い回しを、わざわざ用いたということになる。

これら四例の訓読語はいずれも、作品の導入部分にあたる文章に用いられている。土佐日記の短い冒頭部分だけで、四つもの訓読語が使われていることになる。恐らくこれから書き始める日記の冒頭文ということもあり、改まった様子を与えるために用いていると考えられる。萩谷朴氏は「本来男性の執筆する漢字漢文のものである」という当時の社会的通念を前提として、それを女性が模倣して日記を書いているのだとう女性仮託のポーズを完璧なものとするため」に、「^{注17}「かれこれ」「くらべつる」「日しきりに」というような堅苦しい言葉遣いは、〈…中略…〉男性の日記文体、すなわち変体和臭の漢文調を出そうとする、苦肉の表現技法であると考えられる」としている。この「それのとし」「いささかに」「かれこれ」「くらべつる」といった訓読語は、男性らしさを表現しようと苦肉の策で用いているという。確かにそのような意図をもって、貫之が地の文に訓読語を用いている可能性もある。そのためこの日の計四つの訓読語は、「序文としての莊重味を加え」ようとし、また、「当時の日記が男性の書く漢字漢文であったため、それに習おうとした女性が書いた日記」という効果を出すために用いたのだと考えたい。

一月二十九日

一月二十九日は「いどこ」「いひけらく」といふ、二例の訓読語がみえる。この場面は、阿波に入ってようやく初めてはつきりとした地名が明かされる。しかもその地名は「土佐の泊」という。貫之はこの地名を、和文語である「いづこ」を用いず、「ここやいどこ」と訓読語を用いて尋ねる。訓読語によって、畏まって喋っている印象を受ける。都人である書き手が問う状況であるため、そのような言葉遣いになっているのだろう。

そしてこの地名を聞くと、「昔、土佐といひけるところに住みける女、この船にまじりけり」と述べる。貫之が国司の任を終えた地こそ土佐であるのに、「昔」住んでいた女が混じっている、という程度にしか言わない。さらに女もこの地について、「昔、しばしありしところのなくひにぞあなる」と言うだけだ。貫之はこの旅のそもそもの出発地をはつきり書かないというこだ。しかし同時に、この地について「おもしろきところに船を寄せて」

とも書いている。そして女は、その昔住んでいたという地を懐かしみ和歌を詠む。その女の台詞の箇所に、「いひけらくーといふ」と漢文訓読語が用いられている。これは貫之ら一行が任を終え、旅立った地を懐かしむと同時に、はつきりと任地であった「土佐」を書かないことにより、都から遠く離れた場所に身を置かなくてはならなかった苦勞といったものが伺えるのではないだろうか。このような気持ちで、訓読語を用いることでより強調し、堅い印象をあたえる。そのためここでも結果的に莊重味が加わってくる。

こういった、莊重味を加える目的で用いられる訓読語の、対象は何だろう。十二月二十一日は日記の書き出しであるため、あえて対象を挙げるとするなら、読者であると考えられる。また、一月二十九日は「女」、二月十六日「心知れる人」が訓読語の対象人物となる。

以上の冒頭にみえる四つの訓読語及び、一月二十九日にある二例の訓読語は、莊重味を加える効果を持っていると考えられる。

第二に、悲しみやわびしさの効果を出している訓読語をみていく。これは、二月五日「ここに」、二月十六日の「ひそかに」の二例がある。

二月五日

訓読語「ここに」の言葉のすぐ後に、和歌が詠まれている。その和歌は亡児のことを「一日片時も忘れ」ることのない、「昔へ人の母」が詠む。ここから、「ここに」は「昔へ人の母」が亡児を想う悲しみを強調し、強めていると考えられる。

二月十六日

この日の「ひそかに心知れる人といへりける歌」という箇所は、二月五日同様亡児を偲ぶ場面である。せっかく長い旅を終えてようやく都へ帰ってきてても、そこにわが子のいないことを悲しむ。そして気持ちの知れた人と、そっと和歌を詠み交わす。ここには、亡児を思う悲しみが漂う。そして「ひそかに」は、この気持ちを強調し、強める効果を持っているだろう。

第三に、望京の念を加える効果をもつ訓読語について考察する。

これは一月十一日の「今し」、二月十六日の「なくして」、二月一日の「いはく」が挙げられる。これらの訓読語は、特に京の都を想って和歌を詠んだり、船出に関することを述べたりしている場面で用いられている。

一月十一日

「今し」は、強調の副助詞である「し」が着いている。和文では「いまぞ」となる。本来の和文「いまぞ」を使わないことによって、ただでさえ注目を集めるための語である「いまぞ」が、余計に強調されることになる。

「日本古典文学全集¹³」の頭注には、先の、「京」と「みやこ」に関するときに一部を取り上げた、「伊勢物語」九段、以下の箇所の投影があるという。

注19
なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総しもふたの国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ魚いさを食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はいやなしやと
とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

「伊勢物語」は、都にいる人を恋しく思う気持ちを、「都鳥」によつて掻き立てられ、一同が涙するという場面だ。貫之ら一行にとつても、都への思いは強い。土佐日記のこの場面でも、童が「羽根」という地名を聞いて、「飛ぶがごとくにみやこへもがな」と歌を詠む。この歌を人々も「げにと思」い、忘れず心に留めている。このことから、ここでの訓読語はこの和漢を強調し、帰京の念をより印象付けるためと考える。

一月十六日

この日にみられる訓読語「波なみなくして」は、和文語では「なくなりて」となる。「ただ、海に波なくして、いつしか御崎といふところわたらむ、とのみなむ思ふ」。このように、先を急ぐ気持ちを表現する箇所訓読語が使われている。本来和文語であるはずの言葉を訓読語にすることで、その気持ちを強調している。

そしてこの日も一月十一日の「今し」同様、訓読語の後に「この波立つを見てよめる歌」と、和歌が詠まれる。歌の内容は海の波が荒いことを詠む。「船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりにつけり」と、細かく日数を記しているところからも、船出できない嘆きや、もどかしさが伺える。

二月一日

「いはく」は、和文語の「いふやう」といふにあたる。「土佐日記全注釈」では、注20
「いはく……となげきて」と反覆確認除法を用いているのは、やはり、めったにせぬ人の和歌を紹介するために、いかにも重苦しい感じを出させる文章効果をねらって用いた文体であろう」としている。「重苦しい感じ」を狙っているのかははっきりと言えないが、ここは日記中で初めて、「いはく（…いへる）」という形の漢文訓読語が用いられている箇所になる。ここでの「船君」とは、恐らく貫之のことだと考えられる。自身の歌を載せながら、「ただ言ことなる」などの低い評価しか与えていない。その船君がせっかく詠んだ歌を載せる、という設定になっている。そもそも和歌を詠むきっかけとなっているのが、「この月までなりぬこと」と嘆きて、苦しきに堪え」なかったためだという。この一文をはさむ形で用いられた訓読語は、この気持ちを強調し、より印象付けている。このことから、ここでの訓

誦語は一刻も早い帰京の気持ち、望京の念を強める働きをしていることがわかる。

第四に、喜びや感動の効果を出している訓誦語を挙げる。これは、十二月二十三日「くによりて」、一月九日「互ひに」、二月五日「今し」、二月七日「堪へずして」、二月九日「ここに」、「いはく」、二月一六日の「いはく」といふ」だ。この効果をもたらす訓誦語がみられる場面も、第三の「望京の念」を加える効果を持つている訓誦語と同様に、「帰京」への強い気持ちと深くか関わる場面で用いられている例が多い。

十二月二十三日

「くによりて」は、八木のやすのりという、土佐で重用したわけでもない人物が、わざわざ餞別をしに来たことを「国人の心の常として、いまはとて見えざるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける」と褒め、「これは、物によりて褒むるにしもあらず」と言い訳のように述べた一文にみえる。重く用いたわけでもない人物からも餞別を受ける、国司貫之の人物を表しながら、八木のやすのりという人物を、本心から「心ある者」として褒め称える気持ちを強調しているのだろう。

一月九日

「互ひに」が訓誦語になる。ここでは「これかれ互ひに」とあり、「かれこれ」として訓誦語を重ねないようにしている。和文語では「かたみに」となる。この人もあの人もかわるがわる見送りに来てくれているのである。前述したように見送りに来た人々のことを、貫之は「志ある人なりける」と褒め、とても好意的に受け止めている。「この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし」とまでいつている。よほど見送りに来たことを喜んでいるのだろう。ここから、この人々に対する喜びと、彼等の行いを賞賛する気持ちを強調するため、訓誦語が用いられているとみられる。

二月五日

二月五日に見られる訓誦語、「今し」という訓誦語は、一月十一日にも用いられていた。しかしその訓誦語がもたらす効果は異なっている。ここでの「今し」は、このすぐ後にある「ここに」という訓誦語同様、訓誦語の後に和歌が詠まれる。「今し」の後の一首めは童が詠んでいる。「ここに」の後の二首めは「昔へ人の母」、つまり亡児の母が詠む。この二月五日にある「ここに」については、悲しみの効果を表している訓誦語として、前述した通りだ。

さて、この「今し」は当然童の和歌に関わってくることになる。この和歌は「京の近づく喜びのあまりに」詠まれている。和歌が詠まれた動機から分かるように、「今し」は京が近づいた喜びや感動を引き出す効果があると言える。

二月七日

この日の「堪へずして」という訓誦語は、本来「堪へで」とあるべき箇所だろう。それを、貫之は訓誦語の用法で書いている。「みやこ近くなりぬる喜びに堪へずして」というこ

とから、「ちやこが近づいた喜び」が、堪えることができないという。つまり、念願の「みやこ」へ近づけたことが嬉しく、その喜びをこらえることが出来ないということだ。その喜びの気持ち、わざわざ訓読語を用いて強調しているのである。その喜びの大きさが知れるだろう。

二月九日

この日は「ここに、人々のいはく」と、訓読語が続けて二例用いられている。ここは情景と合致させながら、業平のことを引き合いに和歌を詠み合い、都が近づいたことを喜び合っている場面だ。「土佐日記全注釈」では、「ここに」が、「紀氏の歴史に重要な意味を持つ惟喬親王の故事をこれから紹介しようというので大いに改まった厳肅な気持ち」の表れだとし、「いはく」を「^{注22}「いはく」を受けた会話文が「……ところなりけり」という会話語の詠嘆で終止し、「いはく」に対応する「……といへり」「とぞいへる」といった卜書きの説明文が省かれているところに、作者貫之自身の万感胸に迫る感動の強さが看取せられる」と解している。確かにわざわざ「ここに」、と場所に注目させ、その場を改めているとも取れる。その後には業平を引き合いに出し、三首もの和歌を詠み合う。そのためか、「いはく」に対応するはずの「いへる」が流れてなくなっている。この狙いとしては、京が近づいた喜びのあまり、立て続けにいくつもの歌が詠まれ、つい「いへる」が流れてしまった、というところだろうか。これらのことから、ここでの訓読語は京の近づいた喜びや感動を表す効果があると分類できる。

二月十六日

「人々のいはく」「この川、飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに変はらざりけり」といひて。この一文にある、「いはく―いひて」が訓読語だ。この箇所は、いよいよ入京する喜びのあまり、和歌を詠みあう。入京できた喜びを強調する効果があるだろう。

以上の五例が、喜びや感動の効果を加えている漢文訓読語と分類したものだ。

またこれらの感情とは、異なる効果を出していると考えられる、三例の訓読語についてもここで考察を加えておきたい。その三例が、一月二十三日「^{おそ}恐り」、二月一日「ひそかに」、二月六日にみられる「いへれば」だ。

一月二十三日

まず一月二十三日の「^{おそ}恐り」だ。ここは、海賊の恐れがある海域でのことである。海賊の脅威が本当にありえたことであるならば、この「^{おそ}恐り」は、堅く畏まった、緊張感を漂わせる効果があると考えられる。

二月一日

次に「ひそかに」についてだ。船君が詠んだ和歌を評する人々の様子を形容する言葉に、訓読語の「ひそかに」が用いられている。船君は基本的に、歌があまり上手いわけではないという設定になっている。その船君がせっかく詠んだ歌を載せていることになる。さら

に、その歌は望京の思いを詠んだものであり、同じく都を恋しく思う船人らにとって、そのような歌を軽々しく批評できない、という遠慮があったのかもしれない。

二月六日

最後に二月六日の「いへれば」についてだ。これは淡路の島の大御おほいごという人物が和歌を詠んだことに向けられた言葉だ。「いと思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる」とある。この淡路の島の大御おほいごという人物は二月六日以前より、一月九日と一月二十六日の二箇所に登場している「専女」、「淡路の専女」と同一人物であると考えられる。一月二十六日の条では、和歌の詠み手として登場しているが、詠まれた和歌に対する評価などは書かれていない。またこの二月六日の文章からいくと、淡路の島の大御おほいごという人物は、普段和歌を詠まないようだ。この「あやしがる」様子から、「いへれば」という訓読語には、淡路の島の大御おほいごがわかを詠んだことに対する驚きや不思議に思う気持ちを強調する働きがあると言えるだろう。

これら喜びや帰京の念を加える効果出すために用いられた訓読語の対象は、主に「見送り人」や「人々」。「心知れる人」や「童」、「亡児」といった人物だ。

ここまでの考察では、まず書き手は、冒頭では莊重味を出すために訓読語用いている。そして見送り人や童、船君なる人といった人物には、喜びや悲しみ、望京の念という書き手の気持ちを強めるために訓読語を用いていると分かった。

第一章 第二節 楫取以外を対象とする漢文訓読語 二

十二月二十九日「くに似たり」は薬師、一月六日「くのごとし」は物持て来る人、一月七日「ひそかに」、「そもそも」は歌主が対象となっている。ここでは、こういった楫取以外の人物に対して用いられている、「厭味」や「皮肉」の効果をもつ訓読語をみていく。

十二月二十九日

まず対象が薬師である十二月二十九日「くに似たり」についてみる。この日の「志あるに似たり」は、「志あるやうなり」とあってもおかしくない。加えて、翌日の元旦には、薬師の持ってきた屠蘇、白散が海に落ちても「海に入れて、え飲まずなりぬ」とあるだけなのである。いかに薬師が持ってきたものに関心がなかったかが伺える。

薬師は、遠藤嘉基氏が指摘しているように、職員令注23によって「凡國博士醫師、國別各一人」と、講師と共に各国に一人ずつ置かれていたようだ。十二月二四日、見送りに来ていた講師に貫之は、「講師むまのはなむけしに、いでませり」注24と敬語を用いている。これに対し、薬師には「志あるに似たり」と書き、「志ある」と断言もせず、敬語も用いていない。それどころか、逆に訓読語を用いている。

さらに、この「志あるに似たり」という訓読語と対応するかのように、一月九日に湊ま

で見送りにやって来ていた、藤原のときぎねや橘のすゑひららについては、以下のように書いている。

藤原のときぎね、橘のすゑひら、長谷部のゆきまさ等なむ、御館より出で給ひし日より、ここかしこに追ひ来る。この人々ぞ、志ある人なりける。この人々の深き志はこの海にも劣らざるべし。

薬師に対する「この人々ぞ、志ある人なりける」という一文は、明らかに「志あるに似たり」の訓読語を用いた書き方とは対照的だ。到底「志」のある人物であると考えていたようには、とても思えない書き方になっている。この「ゝに似たり」という訓読語は、明らかに薬師に対する嫌味、皮肉が込められていると考えられる。

一月六日

次に、物持て来たる人に対して用いられていると考えられる、一月六日「ゝのごとし」についてみる。本来ならばここは、「昨日のやうなり」とあるところだ。それをわざわざ訓読語を用いて「昨日のごとし」としている。漢文にすれば「如昨日」と、たった三文字になる一文で、この日の記述は終わる。一文のみの日記に、わざわざ訓読語を用いているため、堅い印象を受ける。

「昨日のごとし」という内容は、一月五日にある、見送りの「人々、絶えず訪ひに来」ということだ。さらに前日の一月四日、このように、物を持ってくる人々についての記述がある。「まさつら、酒、よき物奉れり。この、かうやうに物持て来る人に、なほしもえあらで、いっさけわさせさす。物もなし。にぎははしきやうなれど、負くる心地す」。この日まさつらという人物が、貫之一行に品物を持ってきた。それ以外にも多くこのようなことがあるようで、「かうやうに物持て来る人に、なほしもえあらで、いっさけわさせさす」と、返礼をする。しかしその後「物もなし。にぎははしきやうなれど、負くる心地す」と続き、自らの国司としての清廉潔白さを書く。翌日の一月五日の、品物を持て来る人々に対する記述が「人々、絶えず訪ひに来」のみになっており、返礼を期待して品物を持ってくる人々にうんざりし、嫌気が差しているように取れる。そしてその翌日の一月六日が「昨日のごとし」なのである。

この「ごとく」という語は、昨日と同様に貫之ら一行から何がしかの返礼を期待し、絶えずやってくる人々に嫌気がさし、うんざりした気持ちを強調するためなのではないだろうか。

一月七日

それから一月七日の、歌主に対して用いられている「ひそかに」、「そもそも」について考察する。「ひそかに」は、「土佐日記全注釈」に以下のようにある。^{注25}「成人の世界に口出し

する子供の、おずおずとした態度が表現されている」とある。確かに、子どもが大人である歌主に対して返歌をするのだから、遠慮ということはあるかもしれない。訓読語によって堅苦しい言い回しをしているのも、そのためかもしれない。しかしそれだけでなく、この訓読語には童が歌を返す相手、歌主が関係してくるのではないだろうか。本来、歌を詠む人として考えられていない存在の童が返歌をする。それだけでも歌主に対しての礼を欠いていると取れる。その童の様子に「みそかに」と和文を用いず、漢文訓読語を用いることにより、遠まわしに歌主のことを皮肉っているのではないだろうか。

遠藤嘉基氏の指摘では、この場面で童の歌を聞きだそうとする大人の発言である「注26そもそも」という語は、「源氏物語」中では「僧侶などの知識階級に属する人のことば」であるという。「日本国語大辞典」には次のようにある。

注27
そもそも【抑】一『接続』（「そも」を重ねて強くいう語。もと主として漢文訓読また漢文訓読調の文章に用いられた）改めて事柄を説き起こすことを示す。一体。さて

「そもそも」も、漢文訓読語であることが分かった。歌主に対する返歌についての文、言葉だけで、二箇所も訓読語を用いている。この「そもそもいかよんだる」という大人の台詞は、童に対して発させた言葉だが、この問いかけの内容は、歌主に対する返歌を問うものであり、童が和歌を詠んだという驚きだけでなく、暗に「あんな歌に対して、どんな返歌が詠めたのか」という意味も持っている。結果的に、「そもそも」という訓読語の対象は歌主と考えられる。

こういった訓読語を用いることで、他の和文より際立って強調されてみえる。和歌が巧くもないのに、都人である貫之ら一行と和歌のやり取りをし、自らの歌の技量を誇ろうとした歌主に対し、わざと漢文訓読語という畏まった言葉遣いを用いることによって、慇懃無礼な表現になっていると考えられるのである。

ここで「みそかに」や「しのびて」ではなく「ひそかに」という訓読語を用いたのは、歌主と対照的に例え童でも、無粋な歌を詠むような歌主とは一線を隔するのだと言いたかったのではないだろうか。そのことにより、結果的に無粋な歌主のことを皮肉っている。

このように「見送り人」や「心知れる人」好意的な感情を持っていない人物に対しては訓読語を使用していることが分かる。では、訓読語が最も多く用いられている楫取は、どのような効果を与えるために訓読語と共に書かれているのだろうか。次にそれを考察する。

第一章 第三節 楫取の滑稽さを加える効果をもつ漢文訓読語

ここからは、「楫取」に対して用いられている訓読語についての考察を行う。まず、先に

も述べたように、楫取に対して用いられている訓読語は、その効果が二つに分けられる。第一に「滑稽さ」を加える効果をもつもの。第二に「皮肉」や「厭味」の効果をもたらすものだ。はじめに、船子・楫取・ある人（楫取）を対象として用いられている漢文訓読語を挙げておく。

十二月二十七日「くらひつれば」（楫取）

一月九日「見えずして」（楫取）

「思へらず」（船子・楫取）

「悪しみして」（船子・楫取）

一月十七日「やうやく」（楫取）

一月二十一日「いふやうとぞいふ」（楫取）

一月二十六日「申して奉る言は」と申して奉る」（楫取）

「すみやかに」（楫取）

一月三十日「くに似たり」（楫取）

二月四日「はなはだ」（楫取）

「しかれども」（楫取）

二月五日「いはく」とぞいふ」（楫取）（同日に三例）

二月八日「ひそかに」（ある人（楫取））

作品中にみられる訓読語計四十例のうち、十五例もの訓読語が船子や楫取、を対象としている。その他の対象としては先にも述べた通りである。このことから、楫取という特定の人物に対して用いられている訓読語が、他の登場人物に比べて特に多いことがわかる。

そこで本節では、楫取に対して用いられた漢文訓読語の中でも、特に「滑稽さ」を加える効果を持っている訓読語について考察する。これは一月二十六日「申して奉る言は」と申して奉る」、「すみやかに」、二月四日「はなはだ」、二月五日「いはく」とぞいふ」（三回）が、これにあたる。まず一月二十六日の「申して奉る言は」と申して奉る」、「すみやかに」の二つの訓読語についてみる。

一月二十六日

「楫取の申して奉る言は、この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめたまへ」と申して奉る」だ。まず「奉る言は」と申して奉る」については、敬語表現をなくせば「いふやう」といふ」となる。敬語を払う相手はもちろん海の神だ。ここは御幣を海の神に捧げ、海を鎮めようという場面だ。そしてこの言葉に挟まれる形で、楫取の台詞に「すみやかに」という訓読語が使われている。和文では「とく」「はやう」となる。この語は楫取が生みの紙に対して口にした言葉だが、楫取が訓読語を口にしていう、という点が重要なのである。

したがって、この訓読語の効果は楫取に向けられたものとなる。

ここは「奉る言は―申して奉る」、「すみやかに」と、訓読語を重ねて用いている。神仏への祈願の場面に、畏まった莊重さを出そうとしたのだろうか。むしろこのように畏まった言い回しや言葉遣いをさせることで、身分の低い楫取が真面目にやればやるほど不釣合いに見え、滑稽に映る。これは、二月四日の「はなはだ」でも言えることだろう。この点については、二月四日の箇所でも考えてみたい。また、御幣を捧げたこの場面は、一月三十日の条にも関わってくる。次に、二月四日の「はなはだ」を考察する。

二月四日

この日にみえる訓読語「はなはだ」の和文語は、「いと」「いたく」「いみじ」などになる。

この「楫取、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」」について、「源氏物語」に漢文訓読語「甚だ」が使われている場面があった。「少女」の段で、夕霧を大学に通わせるため、字を付ける儀式を行うときのことだ。本来源氏ほどの上層貴族たちは、必要な品や学は自然に身につくものとされ、大学に通わないことのほうが多かった。それが貴族にとっての常識であった。そのため源氏を始めとした貴族にとって、博士らの行う儀式は普段見慣れていないものであった。その慣れない様子を見咎めた博士らが、「はなはだ」を口にする。

注28

博士どももなかなか臆しぬべし。源氏「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、きびしう行へ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より外にもとめたる装束どもの、うちあはずかたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座につき並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまでもなり。若き公達は、えたへずほほ笑まれぬ。さるはもの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、しづまれるかぎりをと選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。博士「おはし垣下あるじ、はなはだ非常にはなはだをこなり」など言ふに、人々みなほころびて笑ひぬれば、また、博士「鳴高し。鳴やまむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなん」など、おどし言ふもをかし。

この場面では、博士が威張り笑う貴族を注意する様が面白いというような滑稽な効果を出すために「はなはだ」が用いられている。貴族の目から見れば、博士らが「はなはだ」という漢文訓読語を使い畏まれば畏まるほど、その様が一層滑稽に映る。これと同様に、楫取が「はなはだ」という語を口にし、畏まれば畏まるほど滑稽な印象をうけるのである。この「はなはだ」については、一月二十六日において楫取が「すみやかに」と、訓読語を口にしていることと併せて考えてみたい。本来和歌も解さない無風流な人物である楫取が、

不似合いな漢文訓読語を口にする。これは、とても滑稽なことではないだろうか。このように、楫取に訓読語を言わせているのは、不釣合いな言葉を使う楫取が、真面目に言えば言うほどおかしさが先にたち、滑稽である様子を表現するためだと考えられる。

最後に、二月五日の「いはく―といふ」という言い回しだ。この書き方は、この日の楫取の三つの台詞すべてに共通して用いられている。

二月五日

この日、「いはく―といふ」の言い回しが三度も用いられている。しかもそのいずれも楫取の台詞の箇所となっている。「土佐日記全注釈」^{注29}では「楫取の尊大な態度を表現するため」としている。

「楫取、船子どもにいはく、「御船より、仰せ給^たぶなり。朝北^{あさきた}の、出で来ぬ先に、綱手はや引け」といふ」という本文箇所だ。ここでは、楫取が船子に支持を出している。たしかに尊大な態度と受け取れる。そして、このときの楫取の言い方が、一月二十一日と同様に和歌めいているという。この日は一月二十一日よりさらに進化し、「歌のやうなる言^{こと}」を「おのづから」口になっている。書き出してみると三十字あまりであつたらしく、「げに、三十文^{みそも}字あまりなりけり」と、感嘆している。しかしいくら感嘆しているといっても、やはり本無風流な人間である、所詮は楫取が、和歌めいた言葉を口に出しているのが滑稽だという意識がある。それが訓読語に表れているのではないだろうか。

その他の「いはく―といふ」は、一月二十六日、一月三十日と同様に、神仏に御幣を奉る楫取を描く場面での、楫取の台詞に使われている。楫取が大真面目に神仏に御幣を捧げているのに対し、貫之は「口惜し」などと書いており、大真面目な楫取を冷ややかな目で見る。御幣をささげた後、海が鎮まる。これについても、「楫取の心は、神の御心なり」という言葉で締めくくり、これ以降、二度と楫取の名を出さなくなる。これは相手を褒めているようで、実は相手を思い切り皮肉って言っている言葉だ。そのような言葉を最後に、貫之は楫取の名を伏せ、口を噤むことになる。これらのことから、この二つの訓読語は真面目な楫取の滑稽な様子を笑う気持ち、また痛烈な厭味、皮肉が表現されていると考えることができる。

第一章 第四節 楫取への皮肉や厭味を加える効果をもつ漢文訓読語

最後に、皮肉や厭味を加える効果をもつ訓読語について考察する。これは十二月二十七日「くらひつれば」、一月九日「見え^みずして」、「思へらず」、「悪し^{わる}みして」、一月十七日「やうやく」、一月二十一日「いふやう―とぞいふ」、一月三十日「く^くに似たり」、二月四日「しかれども」、二月八日「ひそかに」の計九例である。

十二月二十七日

「くらふ」については、「日本国語大辞典 第四卷」の「語誌」には、以下のように書かれている。

^{注30}
くらう くら・ふ【食・喰】

〈…前略…〉中古仮名文学作品には「くらふ」はほとんどみられず、一方漢文訓読の方では「くふ」も用いられるが「くらふ」の方が多い。「くらふ」は俗語的位相と漢文訓読語系文語という両極端で使われたことになるが、漢文訓読の「くらふ」は当時の卑俗語としての用例が影響したものとも解釈されている。

また、「日本古典文学全集¹³」の頭注には「^{注31}「くらふ」は「食ふ」より卑しい語。船頭批判の気持ち」とある。ここでの「くらふ」は漢文訓読においてよく用いられる、堅苦しい言い方という意味ではなく、楫取の卑俗性を表現するために、俗語的な意味を込めて用いられているのだろう。なぜ楫取に俗語を使わせるのだろう。それは、書き手が楫取のことを、丁寧な言葉遣いより、俗語が似合う、雅な人物ではないと考えている点から来ているだろう。ここから、楫取を俗な人物として快く思っていないということが分かる。

一月九日

この日にある訓読語、「見えずして」は、「西東も見えずして」とある。「土佐日記全注^{注32}」には、「上弦ごろの半月が、そんなに暗いはずがない」という理由から、「乗客の心細さと船員の気随さとを効果的にコントラストするためのフィクション」、「誇張」であり、「戯曲構成・脚色虚構」と判断している。また、この日は船が岸から離れるにつれて、船の人も見えなくなるという一文もある。ここは、対句的に文章が並べられており、まるで漢詩の書き下しのようなものもある。対して、「見えずして」は対句表現ではなく、まさに漢文訓読語そのものを用いている。次にその九日の該当箇所を並べて記している。

かくて漕ぎ行くまにまに、海のほとりととまれる人も遠くなりぬ。船の人も見えずなりぬ。岸にもいづことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。

〈…中略…〉

かくあるを見つつ漕ぎ行くまにまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取の心にまかせつ。

「志ある人」である見送りに来た人々には、対句表現を用いて書いている。これに対して天候や、その天候を読んで船を出すのが仕事である楫取に関する記述では、漢文訓読語を用いていることになる。

「西東も見えずして」という文章は、そのすぐ後の「天氣のこと、楫取の心にまかせつ」

にかかっている。そうすると、確かに「見えず」というのは虚構だけではなく、この訓読語が楫取に対して用いられていると考えられる。

「思へらず」もまた、船子と楫取にかかっている。彼等の口にした船歌により、先ほどまで「いとも心細」く、「船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣」^ねいていた国司一行は、その歌によって人が笑うのを聞き、「海は荒るれども、心はすこし風」ぐ。歌をきいてすぐに心が風いだのではなく、歌で人が笑うのを聞いて心が風いである。船子や楫取の歌が、直接そうさせたわけではない。これによって、天気、天候に関しては一任している楫取が、こんな荒れた海であるにも関わらず船出をしたこと、一行が怯えているのに船歌を歌う様子を、皮肉を込めて描いると考えた。

「悪しみして」は、「翁人一人、専女一人」^{おきなひとひとり たうめ}に対して使われている。彼らは気分を悪くして、食事もせず早々に寝てしまった。これは、もしかしたら荒れた海を渡ってきたせいでも気分を悪くしたのだろう。気分を害したことを重く見てそのことを強調し、堅い雰囲気を出そうとしたのかもしれない。そうするとやはりここの海が荒れているにも関わらず船出した楫取に対する遠まわしな厭味とも取れる。

一月十七日

「やうやく」は、和文では「やうやう」にあたる。この「やうやく」は、雲が晴れてきていた明け方に船を進めたが、だんだんと雲行きが怪しくなってきたてしまった状況で使われている。せっかく前日から空を覆っていた雲もなくなり、船出できた喜びを和歌に詠みながら進んでいたところだった。それを「夜やうやく明けゆく」につれて、雲行きが怪しくなってきたと、楫取が船を返してしまったのである。つまりようやく船出が叶い、皆で暁月夜の興を催していたものを、天候が悪くなってきたという不粋な楫取が台無しにしてしまったのである。ただこのあと本当に天気がくずれたようで、「雨降りぬ。いとわびし」とある。このような天候の悪化は楫取のせいではないにしろ、船出を喜んで一行に水を差したのは楫取であることにはかわりはない。そのため、「夜やうやく明けゆくに、楫取ら、」と訓読語と「楫取」という語を続けて書き、やり場のないわびしさを楫取へと向けていると考えられる。

一月二十一日

一月二十一日の訓読語は「いふやう—とぞいふ」だ。本文、「楫取のいふやう、」^{くみとり}「黒鳥のもとに、白き波を寄す」とぞいふ」の箇所は、本来訓読語を用いなければ「いふやう—といふ」となる。それを、「とぞいふ」と訓読語を用いて強調している。そしてここは、楫取が「黒鳥のもとに、白き波を寄す」という、「ものいふやうにぞ聞こえたる」言葉を口にする場面だ。「人の程」にあわないただの楫取などが、「ものいふ」ように聞こえる言葉を口にした。これは、本来そんなことは到底言えない楫取が訓読語を用いることによって、彼の言葉を強調し、それによって楫取を皮肉っていると考えられる。

一月三十日

ここは訓読語を用い、「神仏の恵みかうぶれるに似たり」とある。和文語では「く」に似たり」が、「やうなり」「やうなる」となる。この「く」に似たり」という訓読語は、十二月二十九日にも薬師に対して用いられていた。素直に神仏の恵みのおかげだと言い切らず、わざわざ「く」に似たり」と遠まわしにいい、含みを持たせる。これは、この日の日記、「海賊は、夜歩きせざなりと聞きて（…中略…）からく神仏を祈りてこの水門をわたりぬ」の箇所と呼応しているとも考えられるが、「今日、海に波に似たるものなし」という一文から、海賊の脅威についての神仏の恵みではなく、海荒れに関する神仏の恵みであることが分かる。ここは、一月二十六日の楯取が御幣を捧げた場面のことを指していると考えられる。そうすると、その二十六日に楯取が御幣を捧げたことを、内心では快く思っていなかったということになる。一月二十六日の「奉る言は―申して奉る」「すみやかに」、一月三十日の「く」に似たり」、この三つの訓読語は、全て楯取への厭味、皮肉、冷やかな気持ちの表れであると取れる。

二月四日

ここでは、「はなはだ」の対象が楯取のため、「しかれども」について考察する。楯取の台詞である、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」に対し、書き手は「しかれども、ひねもすに風波立たず」と訓読語で否定する。訓読語という畏まった言葉遣いは不釣合いな楯取の台詞に対し、同じく訓読語を用いて皮肉っぽく言葉を否定している。

二月八日

この日は本来和文語で、「みそかに」や「しのびて」とあるところだ。そこに訓読語である、「ひそかに」が使われている。ここは「ある人」が持ってきた、「あざらかなる物」について、一行の男たちがこそそこそと悪口を言う場面だ。これは「男ども」から、「ある人」に対する厭味な気持ちが表示されている。では「ある人」とは誰だろう。これには一月十四日が関係してくるだろう。この日の、「楯取りの昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米を取り掛けて、落ちられぬ。かかること、なほありぬ」という箇所には、楯取が魚を持ってきたので米と交換してやった。このようなことはまだあった、と記してある。一月十四日にある「かかることなほありぬ」が、この箇所だと考えると、この日の「ある人」は楯取であると考えられる。このように貫之は、二月五日を境に楯取の名をはっきりと記さなくなる。直前の二月五日には畏まった訓読語を多用しながら、「楯取の心は、神の御心なり」とまで言い、相手を皮肉っていた。それが、この二月八日になると、厭味こそ変わらないものの、楯取という名を出さなくなっていることが分かる。

第二章 第一節 楫取に対する気持ち

以上のような考察により、楫取に関する記述の箇所、漢文訓読語が多用されており、その多くは楫取への厭味や皮肉といった効果をもたらしていることが分かった。また、厭味や皮肉の効果を表すための訓読語は楫取だけでなく、薬師や歌主に対しても用いている。このことから彼等もまた、貫之にとって気に入らない人物であったと言える。

これらの訓読語はすべて貫之の、彼らに対する嫌悪感から来ているものだと考えられる。貫之が楫取を嫌悪した理由としては、次のようなことが理由に挙げられる。

まず、一刻も早い帰京を望む一行にとって、何日も港に足止めされたことが大きな理由のひとつとなるだろう。出航を決定していたのは楫取だ。「天氣のこと、楫取の心にまかせつ（一月九日）」と、天候のことは楫取に任せているとある。その舵取りが天候の判断を誤り、港に足止めされることがある。二月四日、「楫取、「今日、風、雲の気色はなはだ悪し」といひて、船出ださずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風立たず。この楫取は、日もえはからぬかたみなりけり」。このように、ろくに空模様も予測できないと文句を言っている。船出できる場所を天候を誤り足止めされた怒りから、楫取に対する嫌悪感が出ている。

第二の理由として、和歌もろくに理解できず、詠むことも出来ない無風流で無教養であることが挙げられる。十二月二十七日に「楫取もののあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早く住いなむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば、船に乗りなむとす」と、別れを惜しむ人々に、風流を解さない無粋な楫取が水を指している場面がある。ここだけではなく、一月十八日にも「この歌どもを、人の何かといふを、ある人聞きふけりてよめり。その歌、よめる文字もじ、三十文字余り七文字。人みな、えあらで、笑ふやうなり」とあり、とてもまともな和歌が詠めない様を人々が笑っている。

そして最後に、これが最も大きな要因と思われる、楫取との不平等な食料品の物々交換だ。これによって利益を求める楫取の強欲さが、楫取を嫌悪する理由の一つとなっているのだろう。

「楫取りの昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米よねを取り掛けて、落ちられぬ。かかること、なほありぬ。楫取、また鯛持て来たり。米・酒よね、しばしづくる。楫取、気色悪しからず（一月十四日）」や、「ある人、あざらかなる物持て来たり。米して返り事す。男ども、ひそかにいふなり。『飯粒して、もつ釣る』とや」。かうやうのこと、ところどころにあり。今日、節忌すれば、魚不用（二月八日）」とある。釣り合わない物々交換が度々行われたようだ。二月八日に至っては、要りもしないにもかかわらず交換をさせられている。

海の神に幣を奉るよう促す楫取にひっかけて、貫之は二月五日に以下のようにも言っている。

楫取のいはく、へ…中略…「幣を奉り給へ」といふ。いふに従ひて、幣奉る。へ…中略…「眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡の面のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな

いたく、「住江」「忘草」「岸の姫松」などいふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。舵取の心は、神の御心なりけり

幣を多めに奉ると、海が静まり波風がなくなったという。そこで幣を奉るよう進めた楫取のことを「舵取の心は、神の御心なりけり」とまで言う。一見褒めているこの言葉は、実は不平等な物々交換をしてくる楫取の強欲さとを引つ掛け、皮肉を述べているに過ぎない。「神の御心」とまで言い、よほど楫取の強欲さに嫌気がさしていたのだからということがうかがえる。

以上のことから、楫取に関係する箇所で訓読語が多用されていると言える。それは貫之が楫取を嫌悪しており、その気持ちをより効果的に表現するための強調表現だと考えられる。

結

貫之は仮名文で記した日記において、約四十もの漢文訓読語を用いていた。訓読語は和文語に比べて簡潔な言葉となっている。そのため堅苦しく、畏まった印象を与える。訓読語が用いられた箇所は、和文語で書かれた他の文章より強調されていると言える。

そしてその訓読語がもつ効果を向けられた対象人物は、主に「楫取」であった。つまり貫之は楫取に対する気持ちを強調して表現しているということになる。

また「楫取」以外に訓読語が向けられた対象人物としては、「八木のやすのり」や「船君なる人」、「淡路の島の大御」といった人物がいる。こういった人物と楫取に対して用いられている訓読語は、強調したい気持ちが異なっている。これらの人物は貫之が信頼していたり、貫之と同様「都人」という立場にあり、雅な行動や言動が似つかわしい人物であったりしている。そのため彼等に対して用いられている訓読語、十二月二十三日の「くによりて」や、二月一日の「いはく」、二月六日の「いへれば」は、「喜び」や「賞賛」、「感動」といった気持ちを強調するために用いていると考えられる。

では次に楫取に対して用いた訓読語は、楫取に対するどのような気持ちを強調しているのだろう。それは第一に、一月二十六日や二月四日の楫取の台詞にみられる、「すみやかに」、「はなはだ」といった訓読語によって強調された、「楫取」という身分に似つかわしくない、畏まった言葉を口にすることからくる「滑稽さ」。第二に、一月九日の「見え^めずして」、「思

へらず」や、二月四日の「しかれども」といった訓読語によつて表現されている、「皮肉」や「厭味」の気持ちを強調している。これは、船出を決定するために天候のことを一任している楫取が、日が沈んでも貫之ら一行を気にかけないで船を進めたり、天候もろくに判断できないでいたりする。海に慣れているのか、楫取にとっては夜の海もへいきなのだろう、という厭味な気持ちや、天候も判断できないのではないかという気持ちが表れており、本来航海の専門家であるはずの「楫取」を皮肉ついていると言える。

こういった、楫取の「滑稽さ」や楫取に対する「皮肉」、「厭味」な気持ちという気持ちを強調しているのは、貫之が楫取のことを嫌悪していることから来ているのだと考えられる。ちなみに訓読語を用いて、気持ちを強調している人物として、「楫取」意外に「薬師」や「歌主」と言った人物がみえる。このように、貫之は嫌悪感を

貫之が嫌悪した理由としては、次のようなことが理由に挙げられる。

第一に、一刻も早い帰京を望む一行にとつて、何日も港に足止めされたことが大きな理由のひとつとなるだろう。恐らくこれが楫取を嫌悪する最も大きな要因であると考えられる。四年もの長い間離れていた都へ、貫之は一刻も早く帰りつきたかったようで、その気持ちは作品全体を通して書かれている大きな主題の一つだ。それほど大きな帰京という目的を滞らせる原因の一つを作った楫取を、貫之は好意的に受け止められなかったということだ。

第二の理由として、和歌もろくに理解できず、詠むことも出来ない無風流で無教養であることが挙げられる。都人であつた貫之ら一行は、無風流な楫取らに、海上では敵わない。都人としての尊厳を守るためにも、楫取は貫之ら一行より下の立場でなくてはならなかったのである。

最後に、利益を求める楫取の強欲さが、楫取を嫌悪する理由の一つとなっている。

以上のような理由から、貫之は楫取を嫌悪しており、その気持ちをより効果的に表現するために訓読語を用いた。以上のように、仮名文日記における漢文訓読語の果たす役割は対象人物に対する感情の強調表現や莊重味を加えるためであり、無意識に用いられたものではなく、貫之が意図的に用いた表現であつたと言えるのである。

終

注

序 注

注 1 「土佐日記全注釈」(六十頁) 萩谷朴著 角川書店 一九六七年八月三十日

(一九九五年二月十五日第十八版に依る)

注 2 遠藤嘉基 「『文体と表現意識』——土佐日記の文章を通して——」

〔京都大学文学部研究紀要〕巻号4 京都大学 一九五六年十一月二十日〕

注3 注1に同じ（六十、六一頁）

注4 注1に同じ（六十、六一頁）

注5 注1に同じ（六十、六一頁）

注6 注1に同じ（六十、六一頁）

注7 筑島裕 「第六章仮名文学と漢文訓讀 第三節」（八二六頁）

『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』 筑島裕著 東京大学出版

一九六三年三月十日

注8 注2に同じ

注9 注2に同じ

注10 注7に同じ（八二二頁）

注11 「日本国語大辞典 第二版 第一巻」（六六一頁）

編者：日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部

小学館 二〇〇〇年十二月二〇日

注12 以下、本文はすべて「新編日本古典文学全集」¹³ 土佐日記 蜻蛉日記」を使用する。

〔校注・訳者：菊地靖彦、木村正中、伊牟田経久 小学館 一九九五年十月十日〕

第一章 注

注13 注1に同じ（五七、五八頁）

注14 注1に同じ（五八、五九頁）

注15 「日本国語大辞典 第二版 第四巻」（二〇五二頁）

編者：日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部

小学館 二〇〇一年四月二〇日

また、「角川古語大辞典第二巻」（『角川古語大辞典 第二巻』（八三頁）

編者：中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義 角川書店 一九八四年三月）では、この箇所

を例に挙げ、「お互いに親しく付き合う」としている。

注16 注1に同じ（六一頁）

注17 注1に同じ（六一頁）

注18 注12に同じ

注19 「新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語」

（九「東下り」、一二二頁）

校注 訳者：片桐洋一、福井貞助、高橋正治、清水好子

小学館 一九九四年十二月二〇日

注20 注1に同じ（三〇四頁）

注 21 注 1 に同じ (三六七頁)

注 22 注 1 に同じ (三六七頁)

注 23 注 2 に同じ

また、「国司制度」(吉村茂樹著 塙書房 一九六二年九月二〇日)にも、「雑任国司」に「国博士・国医師・陰陽師及び弩師もこれを総称した場合もあった」とある。しかし一月二日には「講師、ものさけおこせたり」と敬語を用いていない。

注 24 講師自身が来たわけではなく、人を使って酒などを持つてこさせた点が藤原のときとねらと異なっていることから、「所詮講師も最後まで見送りに来るわけではないのか」という気持ちが表れているのだろうか。「日本古典文学全集13」の頭注では「見返りを期待するらしい講師に対する反感からか」とある。

注 25 注 1 に同じ (一四二頁)

注 26 注 2 に同じ

注 27 「日本国語大辞典 第二版 第八卷」(五〇三頁)

編者:日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部

小学館 二〇〇一年十月二〇日

注 28 「新編日本古典文学全集14 源氏物語三」(「少女」、十六頁)

校注・訳者:阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛 小学館 一九七二年二月二〇日

注 29 注 1 に同じ (三三二頁)

注 30 注 15 に同じ (一〇三九頁)

注 31 注 12 に同じ

注 32 注 1 に同じ (一六九頁)

参考文献目録

テキスト

『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』 校注・訳者:菊地靖彦、木村正中、伊牟田経久 小学館 一九九五年十月十日

参考文献

樋口寛 「土佐日記」に於ける貫之の立場」

(成武堂版『古典文学の探究』一九四三年六月)

『日本文学研究資料叢書 平安朝日記I』編者:日本文学研究資料刊行会 有精堂
一九七一年三月三〇日 (一九七四年六月十五日再版による)

『国史大系新訂増補十日本紀略前編』 編集者:黒板勝美、国史大系編修会 吉川弘文館
一九六五年五月二〇日

- 『大漢和辞典 卷一』(五四五頁) 著者・諸橋轍次 大修館書店
一九五五年十一月三日(一九八四年四月二十日修正版による)
- 遠藤嘉基 「『文体と表現意識』——土佐日記の文章を通して——」
『京都大学文学部研究紀要』巻号四 京都大学 一九五六年二月二十日
渋谷孝 「土佐日記における和歌——その意義と機能」
『文芸研究』通号二九 一九五八年七月
『国司制度』 吉村茂樹著 塙書房 一九六二年九月二〇日。
- 築島裕 「土佐日記と漢文訓讀」
『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』(第六章仮名文学と漢文訓讀 第三節)
著者・築島裕 東京大学出版社 一九六三年三月十日
『土佐日記全注釈』 萩谷朴著 角川書店 一九六七年八月三〇日
(一九九五年二月十五日第十八版に依る)
- 『新編日本古典集成(第六回) 万葉集一』
編者・青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 新潮社 一九七六年十一月十日
築島裕 「土佐日記と漢文訓讀」 『日本文学研究資料叢書 平安朝日記Ⅰ』
日本文学研究資料刊行会 有精堂出版 一九七一年三月三〇日
鈴木知太郎 「土佐日記の構成——特に対照法的手法について——」
『日本文学研究資料叢書 平安朝日記Ⅰ』 日本文学研究資料刊行会 有精堂出版
一九七一年三月三〇日
- 『伊勢物語総索引』 編者・大野晋、辛嶋稔子 明治書院 一九七二年五月十日
『日本古典文学全集二十九 平家物語』 校注・訳者・市古貞次 小学館
一九七三年九月三〇日
- 『源氏物語用語索引上巻——対校源氏物語新釈別巻1』
著者・木之下正雄 国書刊行会 一九七四年七月二五日
『源氏物語用語索引下巻——対校源氏物語新釈別巻2』
著者・木之下正雄 国書刊行会 一九七四年七月三一日
- 『新編日本古典集成(第二一回) 万葉集二』
編者・青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 新潮社 一九七八年十一月十日
『新編日本古典集成(第四一回) 万葉集三』
編者・青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 新潮社 一九八〇年十一月十日
『新編日本古典集成(第五五回) 万葉集四』
編者・青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 新潮社 一九八二年十一月十日
『角川古語大辞典第二巻』 編者・中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義 角川書店
一九八四年三月

- 『新編日本古典集成（第六六回） 万葉集五』
 編者：青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎 新潮社 一九八四年九月十日
- 『時代別国語大辞典 室町時代編二』 編者：室町時代語辞典編集委員会 三省堂
 一九八七年七月十日
- 『新日本古典文学大系五 古今和歌集』校注者：小島憲之、新井栄蔵 岩波書店
 一九八九年二月二十日
- 『新日本古典文学大系7 拾遺和歌集』校注者：小町谷照彦 岩波書店
 一九九〇年一月十九日
- 平沢竜介 「土佐日記における訓読語——貫之の使用意図——」
 『白百合女子大学研究紀要』巻号二十六 白百合女子大学 一九九〇年十二月
- 神尾暢子 「土佐日記の構成と表現」 『愛媛国文研究』通号四十
 愛媛国語国文学会 一九九〇年
- 渡辺久壽 「土佐日記の諧謔表現——その内在的意義について——」
 『日本文芸論集』 山梨英和短期大学国文学 一九九一年十二月十日
- 『新編日本古典文学全集20 源氏物語一』
 校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 小学館 一九九四年三月一日
- 『時代別国語大辞典 室町時代編三』 編者：室町時代語辞典編集委員会
 三省堂 一九九四年三月二〇日
- 『時代別国語大辞典上代編』 編者：上代語辞典編集委員会 三省堂
 一九九四年十月一日
- 『角川古語大事典第四巻』 編者：中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義 角川書店
 一九九四年十月十日
- 『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』校注者：小沢正夫、松田成穂 小学館
 一九九四年十一月二十日
- 『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』
 校注・訳者：片桐洋一、福井貞助、高橋正治、清水好子 小学館
 一九九四年十二月二〇日
- 『新編日本古典文学全集21 源氏物語二』
 校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 小学館 一九九五年一月十日
- 『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』
 校注・訳者：菊地靖彦、木村正中、伊牟田経久 小学館 一九九五年十月十日
- 『新編日本古典文学全集14 源氏物語三』
 校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 小学館 一九九六年一月
- 『新編日本古典文学全集23 源氏物語四』 校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、

鈴木日出男 小学館 一九九六年十一月十日

『新編日本古典文学全集 24 源氏物語五』

校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 小学館 一九九四年三月十日

『新編日本古典文学全集 18 枕草子』 校注・訳者：松尾聰、長井和子 小学館

一九九七年十一月二〇日

『新編日本古典文学全集 25 源氏物語六』

校注・訳者：阿部秋夫生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男 小学館 一九九八年四月一日

『角川古語大辞典 卷五巻』編者：中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義 角川書店

一九九九年三月十日

蟹江希世子『土佐日記』異空間の考察―歌詠者としての「童」を中心に―

「情報表現論集 2巻」 編集：名古屋大学大学院人間情報学研究科社会情報学専攻情報

表現論講座 一九九九年三月三十一日

『新編日本古典文学全集 19 和漢朗詠集』 校注・訳者：野禮行 小学館

一九九九年十月二十日

『新編日本古典文学全集 17 落窪物語 堤中納言物語』

校注・訳者：三谷栄一、三谷邦明、稲賀敬二 小学館 二〇〇〇年九月二〇日

『時代別国語大辞典 室町時代編五』 編者：室町時代語辞典編集委員会 三省堂

二〇〇一年一月一日

『日本国語大辞典 第二版 第四巻』 編者：日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館

国語辞典編集部 小学館 二〇〇一年四月二〇日

『日本国語大辞典 第二版 第八巻』 編者：日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館

国語辞典編集部 小学館 二〇〇一年八月二〇日

『日本国語大辞典 第二版 第十二巻』 編者：日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館

国語辞典編集部 小学館 二〇〇一年八月二〇日

資料 漢文訓読一覧表

	月日	漢文訓読	箇所	対象	効果	結果	和文語		
土佐	12月21日	1	それのとし	地	ナシ	強調・堅い	莊重味・女性仮託	そのとし・さいつとし	
		2	いささかに	地	ナシ	強調・堅い	莊重味・女性仮託	いささか	
		3	かれこれ	地	ナシ	強調・堅い	莊重味・女性仮託	これかれ・ひとみな	
		4	くらべつる	地	ナシ	強調・堅い	莊重味・女性仮託	ならぶ・たぐふ	
	12月22日								
	12月23日	5	～によりて	地	八木のやすのり	強調	喜び・賞賛		
	12月24日								
	12月25日								
	12月26日								
	12月27日	6	くらひつれば	地	楫取	卑俗性	皮肉	くふ	
	12月28日								
	12月29日	7	～に似たり・ ～に似たる	地	薬師	強調・堅い	厭味・皮肉	やうなり・やうなる	
	1月1日								
	1月2日								
	1月3日								
	1月4日								
	1月5日								
	1月6日	8	～のごとし	地	物持て来る人	強調	厭味	～のやうなり	
	1月7日	9	ひそかに	地	歌主	遠慮・堅い	皮肉・厭味	みそかに・しのびて	
		10	そもそも	大人	(童・歌主)	強調・驚き	皮肉・厭味	そも	
	1月8日								
	1月9日	11	互ひに	地	一行・見送り人	強調	喜び・賞賛	かたみに	
		12	見えずして	地	楫取	虚構・強調	皮肉	みえずなりて・みえで	
		13	思へらず	地	船子・楫取	強調	皮肉	おもひたらず・おもはず	
		14	悪しきして	地	船子・楫取	強調・堅い	皮肉	悪し	
	1月10日								
	1月11日	15	今し	地	童	強調	帰京の願望・望京	いまぞ・いましも	
	1月12日								
	1月13日								
	1月14日								
	1月15日								
	1月16日	16	なくして	地	ある人	強調	出港の願望・望京	なくなりて・なくて	
	1月17日	17	やうやく	地	楫取	強調	厭味	やうやう	
	1月18日								
	1月19日								
	1月20日								
	1月21日	18	いふやう - とぞいふ	地	楫取	強調	皮肉	いふやう といふ	
	1月22日								
	阿波	1月23日	19	恐り	地	海賊	強調・堅い	緊張感	恐れ
		1月24日							
1月25日									
1月26日		20	申して奉る言は と申して奉る。	地	楫取	強調・堅い	滑稽	いふやう といふ	
		21	すみやかに	楫取	楫取	真面目・尊大な態度	滑稽	とく・はやう	
1月27日									
1月28日									
1月29日		22	いどこ	書き手	ナシ	強調・堅い	莊重味	いづこ	
		23	いひけらく - といひて	地	女	強調・堅い	莊重味	いふやう といふ	
1月30日		24	～に似たり・ ～に似たる	地	楫取	強調・堅い	厭味・皮肉	やうなり・やうなる	
和泉	2月1日	25	いはく	地	船君なる人	簡潔性・堅い	望京	いふやう といふ	
		26	ひそかに	地	舟に乗る人 船君なる人	簡潔性・堅い	遠慮	みそかに・しのびて	
	2月2日								
	2月3日								
摂津	2月4日	27	はなはだ	楫取	楫取	真面目・尊大な態度	滑稽	いと・いたく・いみじ	
		28	しかれども	地	楫取	簡潔性・堅い	厭味・皮肉	されど・さはいへど・さりととも	
	2月5日	29	いはく - といふ	地	楫取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう といふ	
		30	今し	地	ある童	強調	喜び・感動	いまぞ・いましも	
		31	ここに	地	亡児	強調	悲しみ	さて	
		32	いはく - といふ	地	楫取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう といふ	
		33	いはく - といふ	地	楫取	真面目・尊大な態度	滑稽	いふやう といふ	
	2月6日	34	いへれば	地	淡路の島の大御	強調	驚き・不思議	いへば	
	2月7日	35	～にたへず	地	船君	強調	喜び・感動	たへで	
	2月8日	36	ひそかに	地	男ども ある人(楫取)	強調	厭味	みそかに・しのびて	
2月9日	37	ここに	地	人々	強調	喜び・感動	さて		
	38	いはく	地	人々	簡潔性・堅い	喜び・感動	いふやう といふ		
2月10日									
山城	2月11日								
	2月12日								
	2月13日								
	2月14日								
	2月15日								
京	2月16日	39	いはく - といふ	地	人々	強調	喜び・感動	いふやう といふ	
		40	ひそかに	地	心知れる人	遠慮・強調	悲しみ	みそかに・しのびて	

参考資料：『土佐日記全注釈』萩谷朴著、『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』(第六章仮名文学と漢文訓讀 第一節、第三節)築島裕